



次 目

- ◇ 研究
 - 探木公司の事業
 - 北海と木材輸送
- ◇ 隨筆
 - 絲蔭瑣談
 - 視察雜感
 - 故郷雜記
 - 歸郷雜錄
- ◇ 文苑
 - 運動會詠草
- ◇ 雜報
 - 學校便り
 - 會員消息

日五廿月十幸七正次 號 七 八 百 第 {日四十月六年四十四治明} 日五廿月每
 可認物便郵種三第 行發期定

研 究

鳴緑江探木公司の事業

坂 本 生

鳴緑江探木公司に關しては曩に或る友人よりの問ひ合せもあり旁々該事業は吾人林業家に對しては甚大の關係を有するものなることを信するが故に爰に其の組織及事業の一斑を御紹介せむ。

(一) 鳴緑探木公司

組織 日支兩國政府出資合辦事業
 資本金 北洋銀三百萬圓全額拂込

創立 明治四十一年九月(光緒卅四年九月)
 公司所在地 滿州安東縣八番通

分局所在地 鳴緑江本流々域、長白、十三道溝、帽兒山支流、渾江流域、八道溝、通化、

營業科目 木材の採伐採伐、資金の貸付、木材の買收、販賣、漂流木の整理、貯木

寄託保管等

創立の由來 鳴緑江探木公司は明治三十八年十二月二十二日北京に於て締結したる

滿州に關する日清條約附屬協約第十條の規定に基き明治四十一年五月十四日協定

の日清合同材木會社に關する取極め並に明治四十一年九月十一日奉天に於て兩國

政府委員の協定せる業務章程に依り兩國政府の合同事業として成立したる國際的

會社なり。

編輯兼發行人 安井正夫 發行所 蘆澤書店
 長野縣四筑摩郡福島町四〇四番地
 長野縣四筑摩郡福島町二八九番地

專探區域及特權 日清合同材木會社に關する取極書第一條により鳴緑江右岸帽兒山より二十四道溝に至る間、該江面を距る六十清里内は之を專探區域と稱し公司直接の自營地として其界外及渾江の森林に關しては之れが採伐に要する資金を貸付し其の木材全部を買收し得るの特權を有す。

(二) 鳴緑江上流の森林

事業地の概況 鳴緑江は其の延長實に貳百余里に至るの大江なるが地勢一般に山岳に富み耕地少く木材を以て主要産物とす之が森林の面積は大約百拾萬町步蓄積一町步の平均三百余尺、總計三億五千萬尺縮と推定せられ材木は紅松、杉松、黃花松、赤柏松、崩松等の針葉樹及柞木、胡桃楸、水曲流、黃披羅、榆木、樺木、色木、刺楸、楊木、樺木、暴馬等の濶葉樹にして一般林相は江面を去る距離に比例して針葉樹の數を増加し來ること、何れの部分に於ても殆んど全様の状態なり、而して現今全公司の主要なる直營事業地は、五道溝八道溝、十五道溝、十九道溝、二十道溝以上二十三道溝等にして公司貸金把頭及一般料棧把頭等は前

記以外の本流々域及支流渾江流老龍崗等の森林内に於て盛に採伐事業に従事しつゝあり。

註 把頭労働者を木把と云ひ木把の頭領を把頭といふ
料棧 木材資本を投じ又は木材賣買の仲介をなし尙把頭賣客の宿泊及雜貨穀物商等を兼ねるものあり「四」を参照
採伐事業 大別して直營事業及貸金事業の二種とす、而して直營事業には採木、造材、運材等各作業別に請負者を定むるを

●生産木材種類別累年比較表(單位連)

年度	材種	紅松	杉	松	雜木	合計
明治四十年	材	四九、八六	三、三六	四、五五	一、〇五	五八、八二
大正元年	材	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	一三、三三
大正二年	材	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	一三、三三
大正三年	材	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	一三、三三
大正四年	材	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	一三、三三
大正五年	材	三、三三	三、三三	三、三三	三、三三	一三、三三

販賣の狀況 從來全公司の取扱ふべき木材の内直營採伐を除き約四分の三は料棧の希望により例年賣戻しを實行し残り四分の一を公司直接販賣として取扱ひたるも、今や六道溝に於ける掘削工事貯木業務に關する設備も完成し販賣上の調査研究も

普通とし木材の安東着後は公司自ら販賣するものにして貸金事業は又把頭貸金及料棧貸金の二種に分たれ共其に木材を抵當物件として作業の進捗に伴ひ貸金をなし木材の安東着後賣却の際元利を回收するものとす。
三)木材の生産量及販路の狀況
生産量 鴨綠江右岸より年々産出する木材は年により甚だ不同ありと雖も平均約百二十萬尺縮内外にして明治四十四年以降大五五年に至る生産數量大約左の如し。

輸出先	明治四十年	大正元年	全一二年	全一三年	全一四年	全一五年
天津	三〇〇,〇〇〇	四〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
山東諸港	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
營口	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
錦州	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
大連旅順	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
朝鮮	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
安東	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
奉天	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
上海	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
滿洲	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
其他	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
計	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇

『備考』製材品の輸出は當地費滿木材中より製材したるものなるを以て茲に之を略す。

(四)安東市場木材商及製材所の概況

木材商 安東に於ける邦人木材商は多くは製材業者にして其大部分は公司と直接取引をなすも小木材商に至りては公司より一旦支那木材商へ賣渡したるものを買入るゝことあり日本木材商は大小十四五軒あるも其の主なるものは左の如し

鴨綠江製材無限公司(鴨綠江採木公司と大倉組と共同出資)

合名會社石崎商店

株式會社山下製材所

三井物産株式會社安東出張所

志岐組

宮下洋行

支那木材商は之を料棧と稱し大小百餘軒

ありて山元資に金を投じて伐木事業を經營し又は原木の仲買賣買を爲し進んで製材販賣を爲すものなきも其の取引商は總生産高の七割に及べり而して其の料棧の主なるもの左の如し

- 成泰興 長豐棧 福慶棧 玉合隆
- 王順棧 玉順隆 永王盛 後裕合
- 信成福 全盛公 世昌東 裕盛東
- 豐恭益 三合盛 協盛興 東和永
- 長順生 福增順 福順興 長順永
- 德合玉 德合永 義興德 永遠棧
- 和聚棧

製材事業 安東に於ける製材事業は近年著しく増加し來り現今原木一ヶ年の消費高は三十五萬尺に及び此等製材は大部分朝鮮及南滿州鐵道一帶よりの注文に係る建築材及板材にして悉く朝鮮鐵道及南滿鐵道に依り各需要地へ輸出せらるゝも尙且需要に應じ能はざるの狀況にして安東

等より南は龍口、芝罘、威海衛、青島の諸港に及び此等の地方は何れも鴨綠江材とは深き縁故を有し、既に二十年來始んと木材の獨占のみならず尙近時、上海市場にも新販賣路を開き進んで南京、漢口等の市場に及ばんとしつゝあり、而して一面南滿州に於ける大連、旅順は勿論、奉天方面も亦、安奉線開通により鴨綠江材の新販賣路を開拓するに至れり、元來大連、旅順は殆んど北海道材奉天方面は北海材の獨占にして鴨綠江材は僅かに其一部に使用せらるゝに過ぎざりしが今日に於ては大部分鴨綠江材を使用するに至れり、而して朝鮮に於ける木材界は從來殆んど日本材なりしに近時鴨綠江材に對する朝鮮鐵道運賃低減は、翕然として其勢力を増大し今や朝鮮鐵道沿線は勿論遠く釜山、元山に及べり斯くの如く鴨綠江材の需要は年一年と増加し朝鮮に於ける鴨綠江材の輸入は年額、二拾萬尺に達せり、試に前七ヶ年間に於ける鴨綠江材各地方輸出統計を示せば左之如し、
註、木材單位の連とは長さ八尺を云ふ斷面の如何を問はず。
鴨綠江材各地別原木輸出高並に當地消費累年比較表

に於ける製材工場の主なるもの左の如し
鴨綠江製材無限公司工場
株式會社山下製材工場
以上の外數十ヶ所の平挽製材工場あり

五)木税及輸出税

木税 木税とは安東に於て木材の取引せざる、際木材代金の外に買手より支那木税局に納付する一種の税金なるも元來此の木税なるものは山價と稱し税金と言ふよりも寧ろ山元立木代金の意味にして兩國政府の協定に依れば採木公司より支那政府へ直接納付するを至當とするも斯くては買手に種々不利益の點あるより便宜上買手に於て代納するの習慣となせり尤も事情により直接公司に於て木税の納付を希望せらるゝ場合は公司は何時たりとも之が請求に應ずるものとす
木税は多くは從量税にして其の税率は税則に依り一定せりと雖も實際に於ては該税率と一致せざる場合多しとす從來の經驗に徴し便宜上之を從價税に換算することときは大約左の如くなるも材價の高低に依り其の歩合を異にするは勿論なりとす
一)紅松 從價 六分
二)杉松 從價 八分五厘
三)黃花松 從價 一割
紅松杉松は從量として同一税率なるも杉松は紅松より其の材價常に約三割低廉なるを以て從價よりせば其の歩合を異にする

るものぞす
輸出税 支那に於ける輸出税は之を海關税と稱し必ずしも外國に輸出する場合にのみ課税するものにあらす

北海道木材輸送

巧公

●抑々本道の森林政策は伐木政策にして、内地にて植林に専らなることは大いに趣きを異にせり。渡島、後志、南石狩等の西部地方に於ては試験的に外國の針葉樹を植付け、又は人工にて補植及下種挿條等を施せる跡なきに非らざるも、極めて小部分にて云ふに足らず。

●この故に森林政策にては伐採せる木材を如何にして運搬するやといふことが、最も重要な問題にして、寧ろ交通政策に連關して思考せらるべきものなり。

●勿論官有林拂下の方針、柚夫等の労働者雇傭、木材の用途販路等を調査研究するの要あれども、第一木材運搬の方途立たざれば何事も手を付くること能はず。而して運送と機關として最も多く利用せらるゝものは鐵道なれば、鐵道政策の如何は本道伐木事業の鍵鑰を握るのみならず、木材價格に付いて云ふも、鐵道運賃は其重要部分を占めて賣行に至大の影響を與ふるものなり。

●木材の鐵道運送は、現今概ね貸切車を用ひ居れるが、七噸車一輛は木材乾燥度合に依りて二十五石乃至四十石の積載量を有し居り平均すれば百石の木材は、七噸車三輛を要し、其運賃計算は専ら積量に依りて爲されつゝあり、然るに鐵道院は運送狀に記載されたる重量容積を超過して積載されたるものには、不足賃金の外其十倍の増運賃を請求し得ること定めありて、發送驛には衡器の備付もなせず、成る丈過積する様に仕向け、線繞曲屈せる鐵道線路にて實質以上の賃金を負るに慚らす更に増收の道を講ずるものなりと云ふは、餘りに院を誣ふるものにあらざるか。

●毎年四月より十月迄、十一月より三月迄の二期に分つて各期間の運送責任噸數を定め運賃割引を行ふ制度ありて、一見本道の木材に對して特別の取扱をなしをれるが如きも、責任噸數は非常に多量に對してのみ行はれ、五萬噸以上五歩引七萬噸以上一割引と云ふが如く、この契約をなし得るは漸く三井等の二三大手筋に過ぎず。

●殊に鐵道院は今年より滞貨解決の一策として特別契約を廢止する方針なれば、責任噸數を制限して割引制度の擴張を行ひ、以つて本道の伐木事業を保護するなどは思ひもよらず。

●近來近海運賃の際限なき昂騰は本道木材の内地移出に鐵道を利用するものを増加せ

しめ、挽材、燒寸軸木の如きものが、鐵路を辿りて遠く關西附近より九州まで運送せらるゝこととなり、挽材、燒寸軸木、製紙材の多量を産出する北見國の滞貨二十萬噸と稱せらるるや、鐵道の缺陷は遺憾なく暴露せり。

綠蔭瑣談

竹川生

此夏、東京農科大學の右田博士が、數日間木會の林森を視察せられた、聞けば以前木會に來られた事はあるが、今程心ゆくばかり視察し得た事はないとの御話であつた。博士は申す迄もなく經理學のオーストリチである。又濃厚親切能く誘掖教導の勞を取らるゝ、今回色々の御話を伺ひつゝ、溫容に接する事數日であつた、小生は久々に知識の洗濯もし、又若返つた様な氣もした。此に書くのは其の福分けてある。

●林木の郷土に付て斯様の話を承つた、造林をするには前に杉があつたからとて杉を造

林する事は考へ物である。檜の跡必ずしも檜を可とする者でない近頃は歐羅巴でも色々研究して、林木も農作物同様連作をすれば其成績は面白くないといふ、茄子の如きは連作の不可な事は皆知つてゐる、林木も稍々似た傾向がある、吉野の林木に於ても何代か杉を仕立てた個所では最初程收穫がないといふ話である。理論からいふても實際から見ても同一樹種を數回更新する事は不可である、天然更新の状態を見てもさうである、如何に同土といつても母樹と同種の稚樹は出來難い、是は色々な原因が綜合された結果に相違ないが、自然の原則に反するからでもある。自然に放置すれば林木はその風土に適應するものゝ内に循環するものであるといふ説が近頃盛んになつて來た、是は大なる研究問題であるこの活を聞いた、成程さもありそふに思はれる。それから更新法に就ても皆伐作業による事は不可との説である、適當な前更作業によるを可なりとの御話である。外國でも一林即ち年齢の揃ふた林分よりは各齡級を備へた林分の方が成長量は大であると謂ふ、其の理由を求むれば空間を多く利用する爲である、成程そふかも知れぬ。芋を作つた上に林檎をも仕立て蜜蜂をも飼ふと大邊に經濟だなどといふ話は能く笑話として聞く事だが、必ずしも冗談ではあるまい。不整一な林相であると又色々な利益も數へらるゝ風が吹いても被害が少くない、一整形で

あると採の所が不圖すると甚だしくやらるゝ害虫が生しても火事があつても皆無枯損する事も先づない地力を常に養ふて居る態等々の繁茂する間隙を與へない常に蒼々として森林美を失はない。極端に賞揚すれば丁度裏の西瓜畑から好きな時にチヨイチヨイ西瓜を手切つては舌鼓を打つ様な具合にやれるといふものゝ又何時山に入つても日蔭で水は滾々として進しるといふ有様である。但し是れには小生の秃筆を大分附加した事を斷つて置く。

●小川南腹の御料林中に丁度右申す様な林相がある、博士は之を見て非常に喜ばれた。そこで林内所々徘徊して地表を見ると、今年生じた細き苗が随分ある、檜か榎か榎か鳥渡判別が出來ぬ様なのが澤山生じてゐる。去年生じたのもある其の前のもある。

●此等の内には榎とかが何とが極明瞭なのが無論ある。一番愉快に思つたのは小屋掛の跡の平坦な所に苗圃よりも、今一層能く發生して居るのを見た事である、先年寺崎林學士の話でも此附近には大分天然生櫨の苗木があるといふ事であつた、其後山に行つても上ばかり見て立木のみ品定めしてゐたが

●今度下を見ると又一段と趣味が多いのに氣がついた、而して上の閉鎖の度合と下の發生の具合とを對照して見ると、一層の面白味がある。此處は是非研究地として見た氣がする。無論之を保護して森林とする

●場合には、樹種を指定する譯には參らぬ。併し母樹の殘し様如何によりては、相當目的を達し得ぬ事もあるまい、諸君も斯様の所を見出して大いに研究して貰ひたい。王瀧事業區には天然更新で檜榎混生林の見事なのがある。但し小面積に過ぎぬ。現に間伐時節に達してゐる、是れが昔の伐跡に不圖不良なる木が残り母樹の役目をした爲である。其母樹は六七年前に伐つて賣つてしまつた。併し余り立派でない所が多く斯かる所には雄木が竹藪の様に生じて居た無論檜榎がなかつたから補植したそのやう方が昔だけに面白い。地拵費を惜むとあつて雜木藪を伐刈して、檜苗木を一本宛植した事があつたが、是は忽ち改められて費用が懸つても充分地拵をして補植された、今では見事な林相をなしてゐる。

●天然更新には補植をなすべからずといふ規則もないから差支ない唯問題は經費である。尙逆つて申せば更新の方法が適切に行なはれ得るや否やである、出來ぬ譯はない。伐採跡に人手で植林するのみが更新ならば林學は不用である。山林學校を工手學校にでもした方が増しである。諸君大いに研究心を起さざるべからずだ。

●林學なるものは容易な處は何でもない、その代り六ヶ敷い所は非常に六ヶ敷い、高等學校三年級では林學が一番若しい様だ、又それ程の素養が入用である。併し容易な方面には是程の事は要らぬ、閑話休題とし

て容易な方面のみを漁つてゐると、他の人が馬鹿にする桑苗を植ふる人は、立派な造林の心得があるといへる。鳥渡でも林學を囓つたならば困難な方面に頭を向けなければならぬ。然らざれば人に重んぜられぬのみか、結局國家に貢獻する事も出来ぬ。研究は一日を冗費するを許さぬ、獨逸人のわらい所は、時を冗費せぬにある、研究を忘れぬにある。理屈を押して何處にか潜ぎつくる点にある。用意極めて周到な点にある自信力強き点にある。敵ながら天晴な者である、日本人が之に負けてなるものか。

本問題をいつか忘れて横道に外れた。博士の話をまだ色々あつたが、何れも精神を緊張せしむる事であつた。筆が途それたのも緊張せる回想が之を導いた爲である。

北海道視察雜感

宇志生

○「こうせかうなりや北海道と決めた」此俗語がまだ僕の頭の中に蟻つて居る、北海道へ行かない人の頭にかう云ふ觀念があるだらうと思ふ

○敗殘の人間が頭かくしに免れるべき場所の如くに考へられた北海道の第一關門たる函館の棧橋に立ちて全く此觀念は根本から洗ひざらひ芟除せられて仕舞つた。

○更に足一步船渠會社に行き堤製罐工場に行き更に又小樽の築港に行き大倉庫(所

謂豆成金を輩出した)に行き選豆場に至り中央都市札幌の博覽會場を見るに至つて洵に北海道に對する觀念のブーアなりしが犇々と迫り來らざるを得ぬ。

○今や北海道の空氣は緊張の極点にありはしないか(或は降り坂であるかも知れぬ)磅礴として漂へる氣分は活氣充滿せる成金氣分と更に今後の幾十年間に眼の玉の飛出す程の發展を計らんとする農民の希望の眼の輝である。

○我日本帝國の領土に於て時局の影響をかく迄良好に享受した農民は恐らく其比少きを信するのである。

○一例を上げしめよ青豌豆一俵(四斗入)が二十八圓迄に飛上つた、手亡豆が二十圓迄になつた、即ち之丈ですらも彼等農民の懐に金貨が充滿せすに居らない甚だしむに至つては青豌豆一俵を以て克く米三俵味増三貫目を購ひ得たと云ふのである

○更に又澱粉は成金の幾百人を輩出した百斤克く二十圓に達し馬鈴薯を栽培する者にして困る位金貨を擁せぬものはない。

○尙更に木材價の騰貴に伴ふ冬期の副業たる運材には一日十圓をすら獲得したるものが珍らしくないそうである婦女子は選豆にも尙一圓餘を得たのである。

○かゝるが故に博覽會場に於ける彼等の買振を見れば札束を驚つかみにして懇求する何物をも高からうが何だらうが、平然として買ひ求める、其隨伴したる(殖民地

は得て好女子が少い故に女尊男卑は免れない趨勢である即ち綺羅びやかに満面飾をした妻君に隨伴したると云つた方が實際である)妻君も赤此機逸すべからずと云つた按配に購求する。

○今や彼の腹は漸く膨れ來つたのである過去の五十年は僅かに只彼等の生命を繼いだに過ぎなかつた然るに今や彼の腹は満ち彼等の希望の一部は明るき場面の中に容れられたのである更に一段の希望が實現せらるべき確かさを以て彼等を煽り立てるのである、即ち此際其手俣をゆるめることなく甘く其強き鼻先を地の中に、上に縫に横に働かしめるならば今後十年の發達は即ち過去五十年以上たるや必然である。

○吾人は臺灣にあれ朝鮮にあれ又南北海道であれ着々として眼覺しき進展を見る事を喜ぶ。

明治初年西郷の臺灣を征せんとするや「取つて然る後如何にするや」の疑念百出途に煙の如く消へ去つたと云ふ時代を追想して感無量たらざるを得ない。

吾人は征服し得る武力を持つ、征服地を同化せしめる襟度も有する朝鮮の實例は瞭として此事實を語る、而して又開拓と利用の有態なるを示して居る。

○然し戒慎は好況時に於て最も必要である偶然に廻り合した戦局の影響に有頂天に

なるのは小國民の弱点である這次の騷擾は一面に於て戒慎を欠きたる一部人士の鐵槌とも云ひ得る道民も此際周到なる戒慎を加へなければならぬ。

○重大なる時局は意識したる國民、徹底したる打算の上に歩を進むる國民に依つて解決せられ進展せられねばならない。眼前の利益の爲に只管官界から民業に入らんとするのみ望む人多き際少しく脱線氣味であるが一言吾人の希望を附加する。

○更に吾人は北海道の森林利用並に拓植上の方針及結果に就て耳目に觸れたる感想を述べたいのであるが時間の餘裕を缺くを以て更に稿を改めて御通知する考である。

故郷に就いて

ほしなみ

演習林の落葉松が日毎毎に茶褐色を増して、峯々で狭く區劃された峽の蒼穹を折々小鳥の群が渡る、

メッキリ秋になつた。毎朝の冷かさに自分の心までが純に落付いて、假に苦悶煩悶色々に掻き亂された、汚濁された、心であつたとすれば、近頃はそれがキッチンと片隅に整頓せられ、メッキリと透して見ゆる様に思はれる。

延び過ぎた庭のコスモスの蕾が大分膨らんで、咲く迄にはもう間がない。

椅子に身を投げて庭の芝生を見つめて居ると、秋の冷氣がヒソヒソ湯上りの足の毛を這ひ上る様に感じられる。

落付いた心、純な心、冷靜な此頃の氣分で筆を取る時は、いつか知らぬ間に廻轉窓が風のために開けられて、何かの葉が机の上へ一片二片舞ひ込むことがある。

私は斯うした自然の訪問者の姿に接したことは一度や二度ではなかつた。

窓の外には出来る限り生育して見たと云つた様な姿のホブラが一、二株、澄み切つた大空に延びて居る。此ホブラは夏の真中、彼の太陽の熾烈なる光の下で、サンザン數多の虫達に悲惨な對遇をせられ一時、一葉もない哀れな痛ましい姿であつたが奮闘努力して凡ての誘惑に打ち勝ち總ての打撃を恢復して、殘暑の中に緑の芽を再び開いた其時程如何にも尊く、如何にも男々しく思はれたりは又さなかつた。

ホブラの先端には赤色の蜻蛉が輪を書いて白雲の往來を氣づかふ様に見えた。

珊瑚と降り注ぐ月光を満身に浴びて、ガラス越に向ふの峯巒を走る雲を眺めて居ると何處かでリンリンと虫が鳴く。

嗚呼秋だ腦髓の奥の奥まで澄み切つて晝の疲勞や倦怠は何處も行つたか跡方もない。世の中の所有雜音が静まつて、苦痛や快鬱の氣が心から取去られ、只茫然として澄渡つた月に對した時、吾の幸福安寧を感謝す

ると同時に、自分の魂が抜けだして故郷の空に逍遙することがある、

自分がウンと癢に障つたにに出合つた時などは、心の平和と冷靜とを保たんとする吾と云ふ者の欲求に應じて、先づ故郷が幻影をなして自分の心を慰藉して呉れる。

殊に生來短氣な自分は此の故郷の味をよく知り得たと思ふ、

精神上に肉體上に突發した事件の結果は往々自分達の心の先端が故郷の温い血潮に觸れて満足を感じ、心臓の鼓動を静めることがある。

『わ、故郷よ故郷よ』斯う云つて凡ての人達が渴仰するの無理はない。

又故郷は『わ前の後には己が居る、モット進みなさい、モットわやいなさい』と犬か何かの様に自分等をケンかけることがある然し自分等は之れがために偉大なる仕事も容易になし得ることが出来る。

故郷には錦を飾れ (俚諺)

古郷へ梅折入れよ刀箱 (芭蕉)

などは此場合を云ふものではなからうか。故郷は此意味に於て自分達の潜勢力の所在であるとも云へる。

故郷はよい。眞實によい。

思ひだした様に軽く吹いて來る夕風にカサリカサリと落葉を運る栗の實や、夕日に眞赤な柿の實が塀越に枝も撓に往來の人々を眺めて居る等は何處にもあり觸れた。平凡

な形である然し之れを故郷へ持つて行くこと一入温い懐味のある姿となるのである雲の浮動、水の流れ吹く風、聳ゆる峯凡てがさうである。

如何に尖つた心でも、如何に荒んだ心でも故郷の温味懐味に抱擁された時には、屹度優しい豊かな心となるであらう此意味に於て故郷は又我温い血潮、優しい血潮の養成所であるとも感じられる。

昔から故郷を憶ふ情を歌にし、詩にしたのは枚擧に遑がない程である。

『秋瓜を見る毎に故丘を憶ふ』と杜甫は云つて居る。又『牀前看月光、疑是地上霜。舉頭望山月低頭思故郷』は李白の心中を穿つたものであると思はれる。更に『霜滿軍營清秋氣、數行過雁月三更』に至つては戰士の切ない望郷の情緒を述べたものであらう。

『さざ波や志賀の大わた旋むども昔の人にまたあはさやも』

と歌人は故郷を歎いた。そして彼の清らかな湖の邊の姿を心に書いて見た。俳人も又。故郷に我植きし柳かな』と其追憶に事を忘れなかつた。

故郷を思ふ事、故郷を追憶する情、それは或意味に於て、自己本来の姿を思ふ心である、ノスタルヂアは自己の心の故郷、體軀を求めんとする自分達の欲求であると思ふ自分の幼年時代や少年時代或は自分達が通つて来た過去に於て故郷の懐しい姿を認め

る。

『自然に歸れ』とは一の懐郷に執着することとは好まない。

郷土を構成するあの黙した山岳、あのしなやかな樹木の頂を形作る曲線、あの山麓に續く高原の緑、その緑を黙綴する黒い小松の林、水晶の様な水、鏡の様な月、それを想像すべし丈でも胸の爽かさを覺ゆる純潔な響を感じ。何時迄も何時迄も其姿と離れたいと思ふ。

けれ共、けれ共、自分達は戀々として執着するの弊害を知つて居る。それは自分等各々其道のために飽迄進行を續けなければならぬからである。

然し其追憶と回顧とは永久に忘れてはならない、苟しくも自己の心を純潔に新鮮に保たんとしたならば懐郷の思ひ、望郷の念に依つて時々心の汚濁を掃はなければならぬと思ふ。

本来の姿……。之れを自分の故郷とすれば、過去は現在に對した故郷である。動機は結果の故郷であり。昨日は今日の故郷と云ふべきではあるまいか。

本来の姿を追憶する。其れは道徳上に於ても、物質上に於ても尊むべき事ではなからうか。我等が或る山に造林しやうとするに先づ山本来の姿を追憶し、考し、現在に於いての作業法や樹種を定めなければならぬ。けれ共何時迄も過去の状態に許り頭を腦ま

す程にも及ばない。

道徳上に於いても同じである、過去の歎樂若しくは煩悶に何時迄も何時迄も、しがみついて居る事を自分は好まない。

然し吾等の事實した生活を要求する道として、過去を反省し、本来の姿を追憶することは必要なものではあるまいかと思ふ。文選の『胡馬は北風に嘶き、越鳥は南枝に巢ふ』と云ふのも、陶潜の『羈馬は舊林を戀ひ、池魚は故淵を思ふ』と云ふのも同じく故郷の追憶に外ならない。

故郷を思ふ心、故郷を顧みる情、それは勇ましくも又優しくもある。

以上述べた様な意味に於て、懐郷の心の尊く且つ崇高な事を、自分は何處迄も信ずるものである。

歸郷雜記

十和田湖南にて 生

六年振りたのしい木曾の夏を味はをうと八月上海漂然任地を飛び出す。

途中で遊ぶことは歸りとして、先づ真直に故郷へ向ふ。車中三十有六時間、八月六日の正午、吾が乗る汽車は轟然福島の停車場に入る。真先き改札口へ飛び出すと、そこにニコニコして迎えて呉れるのは何時も親切なK君

のた父様、親戚の小供を連れて暑いのも厭はずに迎へて呉れた。

たてなつかしい故郷の山河！學校を出てから足掛六年の此間三四度歸つた事はあつても、大方秋の暮か冬であつた、殺風景な山間の町であつた。

峻峯雲を突き清流麓に玉をなす木曾は、さうしても夏に限る。秋田の夏、豊橋の夏、青島の夏、夏なれば何時も故郷の夏を憶ひ出す。今年も涼しい故郷に父母や同胞の温い情愛に包まれて、心行くばかり命の洗濯を仕様。

町を縦に一貫して新町のK君の家へ入る。一昨夜は秋田市にて友と語り更し、昨夜は飯田町から乗つた汽車が御嶽講道者の群のために混雑して一睡もしないので、午後は床を敷いて貰つて燈の点する頃まで寢込む。

【二】

次の日は村役場へ一寸顔を出して、鹿兒島に居るY君の家を訪ねる。

學校に居た頃腕白盛りの君の弟は暫く見ぬ間に驚く程大きくなつてゐる。來年は學校を卒業すると云ふ。兄は高農を弟は此學校を同時に卒業する兩親の喜びは又大いしたものであらう。それから白河で客死したH君の遺族を訪ねて故人の俤を偲び言付を頼まれたK君の實家を訪れて母者人に會つて吾が子の住む秋田の様子を話す。晝食と夕

食は玉瀧から態々出てきた友と共にし青島や濟南の話にはづむ。

【三】

翌八日は在郷軍人の簡閲点呼、福島小學校で行はれる。六時に役場へ行くともう大切集つて居る同窓のF君も、ニコニコして居る。

甲、乙、丙、上等兵、一等卒、砲兵、工兵輸卒、の面々誰を見ても筋骨たくましい。アツパレ國家の干城、夏蠶の忙しい一日を昔に若返つてしきりに茶目を演ずる。点呼場で同窓のK君に遇ふ『君の方へ遊びに行くとぞ』『オイ來い』こんな事を云つて別れて仕舞つた君は今小川の伐木に居る筈だ。

『凡て事は的確でなければいけない』といふ福田大佐の諭示に点呼も終りを告げて愈々今日は父母の膝下へと歸るのである。点呼場には軍服姿凛々しい川崎、内藤先生が居られたが、挨拶する間もなく心ならず其まゝになつて仕舞つた。

家に歸つたのが夜の八時頃、夏蚕の最中だったので、夕餉も終らず一家擧げて給桑に目を廻して居る。早速窮窟な洋服を脱ぎ捨て、多分兄さんのであらう、嫂さんの出して呉れた浴衣を引掛けて薄暗い隅の方に陣取つて、セッセと働く家の人々を相手にいろいろな話をする。夕食の膳に向へば同勢正に十有幾人、軍隊

に居た時は別として、何時も下宿屋の二階で獨りポッチ花碗をつつき廻す時とは。心持が違ふ。

食むものはたとへどんな粗末なものにして此米一粒は此汁一杯は、此漬物一切は、年中不斷の努力の結晶であり代償である一家打揃ふて此團樂に私の心の喜びは何にたどふることも出来なかつた。

翌朝眼を覺ますと、遠くの方で赤子の泣聲がする母に聞いて見たら、今朝嫂さんが女の兒を分娩したのだと云ふ。三月姉さんが男の兒を設け。今年ももう吾が味方が二人増した譯だ。

大姉さんの子供が二人、家の大兄さんの子供が六人、他へ行つて居る兄さんの子供が一人、同じく姉さんの子供が二人、私も知らぬ間に十一人の叔父さんになつて仕舞つた。我が故も益々瑞氣に充たされて來る様に思はれる。家運長久、無事安泰

【五】

親戚の家へ行つたり、知人の家を訪問したり。友と小川に魚を釣つたり、兄弟皆打揃ふて父母の膝下に駄々こねたり、その暇には蠶の手傳をして滞在一週間、眞に天國の如し、最早休みの期日も逼つたので八月十五日又福島へとでて來る。午後上の段に友を訪ねると、丁度そこへ東京に居るY君も來合せて、話に花を咲かせ。Y君とは御大典のあつた歳の秋、大曲

驛で別れたまゝだ。夕食の馳走になり宿に歸ると、盛岡の高農にゐるT君が訪ねてく

れる。薄暗いランプの下でしきりに談ずる、そこへ又先ツきのY君がやつて来る。丁度其日は舊七月十日で御観音様の晩だ。例に依つて興禪寺のた庭で盆踊りがある。三人は早速そこへ足を運ぶ。盆踊りを見るのは六年目だ、若い男が聲張り上げて歌ふ木曾節に今夜程なつかしみを感じた事もなく、今夜程共鳴を感じた事がない。

焼失後再び建られた本堂は未だ木の香も去りやらず、初秋の中空に冴ゆる十日の月に薄く照らされて庫裏遠くして裏の城山と共に静かである。

老幼男女群がる中に大きく輪を書いて、歌を合せて手を振り足をふむ踊りは、何時絶ゆるとも知られない。

三人は他愛もなく踊狂ふ踊子の外に、長く見て居たが、やがて二人に別れて宿へ歸つた。宿には御観音様詣りの親戚の母子もあり、昔から同宿したTさんも二階から降りてきて、茶をすゝり乍ら今宵一夜の故郷の名残を語り更はず。

【七】

翌十六日は車中の人となる。大方の友は夏季休暇に歸省してあらず、米騒動の憂き事に況してや今頃の暑さに東都訪問は思ひもよらず。

來春櫻の時に父母と共に遊ぶ約もあれば松本に二三日滞在して路を越後に取りて進むこゝは初見の地行く千町の小田には青の波をたゞへ、油汲む櫓に至る處に林立をなす、實に越後は『米』と『油』の國である

日本海の怒濤寄せては岩に激し、飛沫は高く車窓をかすめて快又一入、新津より岩越線に入り阿賀川に沿ふて上る。兩岸の風景木曾に勝るとも劣らず。

會津の若松にいでし頃は暮色蒼然として四邊りを包み。飯盛山を土地の者に聞けども見るによしなし。猪名代湖の波の音を暗の中に聞きつゝ郡山にて東北線に乗り換わり汽車は暗の中を眞一文字に北へ北へと進んで行く。

【七】

母校の側を通つて母校も訪れず、恩師の住む町に來ながら、訪ふて敬意を表するでもなく、たとへ命の洗濯であつたにせよ、餘りの横着さに、今更ら乍ら吾れと我身に愛想がつきる。

それでも學校の入口の所でヒョッコリ西澤先生に會つたのはセメテの心やりだ。利用や造林の講議を聞いた昔と、今とのお姿には何の變りもなく、何時もの通りニコニコして居られた。

知つて居る先生がだんだん少なくなつて何となく心細い感じがする。……七、九、一〇……

漫 錄

漫 錄 子

○漫録子が木曾へ來て先第一に驚いたことは岐蘇健兒の大部分と云つては僞弊があるかも知らぬが兎も角多數が脚氣病に苦しめられてゐることである。

○今の人は兜をかぶらぬ故脚氣が多い昔は脚氣になると兜の緒を締めて直したものださうだからかつて兜の緒を締めよと云ふんだ。

○或人が脚氣は木曾の風土病だと云つて居る。脚氣がフット病たることは間違なしだ。脚氣病者に同情のあまり漫録子は茲に人助の爲め秘方を公開する然し名醫大家の治療をやめても行へど云ふのではないやるとやらぬとはかつけたるべし。

○漫録子の療方に曰く、柴胡、茅根、茯苓、甘草、桔梗根、木通(以上各二匁)大黃(一匁)の七種を布袋に入れ小豆二合と共に水にて煮つめ其の小豆を食ふべし。

○大醫の投薬で治らぬ病氣が一寸した賣薬で治ることがある草根木皮とて馬鹿にならぬ論より証據やつてみたまへ。

運 動 會 詠 草

秋氣清澄、去る十月十七日我校第十八回陸上大運動會に際し、來賓諸賢の即吟詠草に對して、深く謝し併せて謹みて左に記す。

和 歌

讀人しらす

開け行く御代の光今照らされて學びの友等の勇ましきかな

安い井 正 夫
若人がまけじと競ふ様見れば老の心も勇みたちにき

山林學校の運動會を見て 千 載
山林の業とる人の運動は四方の紅葉に照りはわにけり

山林の業とる人は常盤樹といとすくやかにそだちけるかな

すくやかに立ちもはたらく人にこそ林の業をこるべかりけれ

運動のすこやかなるを見ても知れ林の業のさきの盛りを

山林の業とる人のすくやかは國の榮々の基にぞある

俳 句

秋晴れやスチウデントノ競争振り 不知

文藝に苦しめられて紅葉かな 竹川

千の手が紅葉と見ゆる行進曲 竹川

川 柳
競争に勝てば飛んだ名譽なり 鳥堂

都々逸下手でも走るは上手今日は私は 不明

學 校 便 り

○新家教諭轉任 明治四十三年以來引續き本校に在職せられたる新家先生には九月十六日附を以て松本中學校へ轉任の辞令に接せらるる因りて全月二十二日講堂に於て告別式を行ひ七宮校長の送辞新家先生の挨拶米久保生徒總代の送辞あり尙生徒一同よりは紀念品を贈る事とし目録を呈せり、越えて二十三日午後二時全先生には松本へ向け出發せられたるを以て職員生徒一同停車に見送れり

○舎監任命 新家教諭轉任後舎監一名欠員中の處九月三十日附を以て塚越教諭舎監に任命せらる

○秋季實習 十月一日より全十二日迄の豫定にて三學年は林産物製造及測量一二學年は苗圃除草霜害豫防造林地地拵及農産収穫の實習をなす

○視察旅行 三學年生及二學年生一同は七宮校長西澤教諭外二名引卒の下に十月四日早朝出發し松本市に開催の信濃山林大會へ出席し林産物品評會を視察し全市泊翌五日牛伏寺川砂防工事視察の豫定なりしも降雨の爲果さずして歸校す

○校長出張 十月一日二日打合せの爲出縣せらる、全月十日より三日間九子町に開かれたる實業教育研究會へ出張せらるる全月

十六日より二十日全國農業教育研究會へ出席の爲出張せらる

○縣下中等學校競技會參加 十月十一日十二日松本市に於て行はれたる縣下中等學校競技會へ參加の爲選手十四人島内小貫兩教諭引卒の下に松本市に赴き奮闘せらる

○佐藤教諭着任 新家教諭の後任として十月十八日着任せる佐藤教諭は東京高等師範學校卒業後巖手縣立福岡中學校教諭京都府與謝郡立高等女學校教諭等女學校教諭等に歴任し今回我校に來任せらるゝ事となりたるものなり

會 員 消 息

○梅村計介君 青島守備歩兵第四大隊第四中隊張店守備隊に所屬し目下張店博山間の鐵道沿線に警戒任務に従事せらる

○松館藤太郎君 巖手縣遠野小林區署へ轉勤せられ造林主任として活動せらる

○中島昌利君 樺太廳眞岡支廳へ轉せらる

○關琴義君 今回山林屬に任せられ茨城縣水戸小林區署に勤を命ぜらる 尙軍籍に於ては工兵少尉に任せられ正八位に叙せらる

○川口勇二郎君 靜岡縣盤田郡佐々間村古河久根鋼山に勤務せらる

○加藤源一郎君 出征歩兵第六十八聯隊第

